

# 原爆被爆者救援・救護活動 炊き出し釜跡地

## || 広瀬酒本舗 ||

昭和二十年八月九日午前十一時二分、米国のB29爆撃機から投下され、松山町上空で炸裂した原子爆弾は、凄まじい熱線と爆風、放射能で地上を襲い、多くの生命を奪いました。長与町（当時、長与村）でも、長与国民学校及び同高田分校に約千人の負傷者が運び込まれ、救援・救護活動が行われました。

爆心地から約六・五キロメートルに位置する広瀬酒本舗では、原爆投下の翌日から警防団の要請を受け、酒工場の鉄釜を使い、炊き出しが行われました。

広瀬酒造場には、大・中・小の三つの釜がありましたが、戦時下のことで大と中の鉄釜は供出されており、使用されたのは最も小さい廻づくり用の酒釜でした。それでも、直径約七〇・深さ約六〇センチメートル、一回の炊き出しで約五百食分を用意できたものとみられます。

無償で行われたこの炊き出しは、一日に三回、約十日間続き、使った米は約千五百俵にも上りました。梅干しづくりが好きだった廣瀬マサさんは、自家用で漬けていた梅干しも全て炊き出しに放出しました。

酷暑の中で炊き出しでしたが、この梅干しのお陰で、おにぎりは腐らなかつたといえます。

広瀬酒本舗では、酒釜での炊き出しのほか、仕入れていた焼酎も救護所へ提供しました。当時、長与村の救護所に医師はおらず、薬もほとんどなかつたことから、応急処置としてこの焼酎が消毒用途で使われたといえます。

焼酎は、三十八個の焼酎壺に入れて提供され、量にして約一〇〇リットルに上りました。一箇所で、これだけ大掛かりな炊き出しが行われ、廣瀬家では、当時備蓄していた米を文字通り、全て放出しました。

その後は、家人も食べるものに困るほどであったといえます。

ところが、戦後しばらくして、北九州から見知らぬ人の来訪がありました。ここでのおにぎりを食べて命をつなぐことができた、そのお礼を言いに来た、とのことでした。私財を投げ打って行われたこの炊き出しが、確かに被爆者のためになったのだと報われる思いを受けたとのことでした。

令和六年八月  
製作 長与町  
協力 廣瀬 範三  
資料提供 長崎市（長崎原爆資料館）  
※廣瀬氏の「廣」は、片に黄



(上) 炊き出しに使われた鉄釜  
直径約70cm・深さ約60cm  
1回の炊き出しで約500食分  
を用意できたとみられる。  
(長崎原爆資料館所蔵)



(左) 長与村の救護所において  
消毒用途に使われたとされる。  
甲類焼酎を入れた焼酎壺  
38個(約1,000L)が提供された。  
(長崎原爆資料館所蔵)

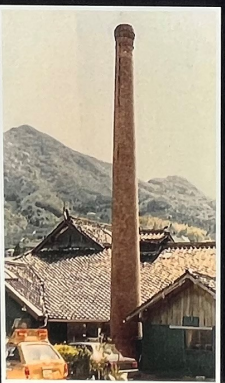
(右下)  
米軍機の機銃掃射の弾痕が残る  
旧廣瀬酒造場煙突

まちづくり景観資産  
景観第2種13号

旧廣瀬酒造場煙突・釜跡

この建造物は、  
本来へ残すべき貴重な財産です

長崎県



### || 廣瀬家と広瀬酒本舗のこと ||

廣瀬家は、幕末の頃に廣瀬範次郎が尾の道酒造を買い取り酒造業を始めた。昭和二十（一九四五）年当時は、廣瀬でんいち 傅一とマサの夫婦二人で酒店を営み、野母崎から杜氏とよしを招いて、日本酒や焼酎などを造った。

清酒「鶴の港」は知られた銘柄である。戦後の米不足で製造を一旦停止したが、佐世保市江迎町の清龍酒造に製造委託し「鶴の港」の販売は継続している。

傅市は、日露戦争の武功で金鶏勲章を受けた元軍人で、在郷軍人会分会長や警防団団長を務め、本土決戦に備えて愛国婦人会に竹槍訓練も施したという。廣瀬家を中心として、地元警防団や愛国婦人会が炊き出しを行ったのは、こうした繋がりもあつたからであろう。

長崎県まちづくり景観資産に指定の旧廣瀬酒造場煙突は、現在の技術では建築が困難な円柱状の煉瓦造りであり、米軍機による機銃掃射の弾痕が残る。